

「描かれた輿」と「造られた輿」

『聆涛閣集古帖』「乗輿」の図と現存する輿の比較・
網代輿の模型制作を通して

“The Drawn Palanquins” and “the Made Palanquins” : Trough Comparison
the Drawings in ‘Reitokaku-Shukochō’ “Jōyo” and the Existing Palanquins
and the Creation of a Model of the Ajiro-koshi

落合里麻

OCHIAI Rima

はじめに

- ①『聆涛閣集古帖』「乗輿一」「乗輿二」の輿の図にみられる特徴
- ②四方輿の検討段階で描かれた下絵の存在
- ③京都御所の御腰輿
- ④描かれた四方輿と京都御所の御腰輿を比較する
- ⑤描かれた網代輿と造られた2基の網代輿
- ⑥聖護院の網代輿
- ⑦京都御所の網代輿
- ⑧描かれた網代輿、聖護院の網代輿、京都御所の網代輿を比較する
- ⑨光格上皇修学院御幸儀仗図の網代輿について
- ⑩『御車轅之図』の網代輿について

【論文要旨】

江戸時代後期に編纂された『聆涛閣集古帖』「乗輿一」「乗輿二」には、京都・奈良の社寺に伝存していた輿や牛車の図が掲載される。中には、透視図を使って立体的に描き、寸法を付した図もあり、それらはこれから製作する輿の概要を示すものであったと推測する。「乗輿一」に描かれた四方輿1基と網代輿2基は、図と同じ様式の輿が京都に現存することがわかった。これら3基の原物の輿の調査結果を基に、意匠、構造、仕様、製作工程等について、ものづくりの視点を含めて考察する。

「乗輿一」内題「菊八葉御輿圖」と同じ様式の輿は京都御所の四方輿である。構造部は木製で黒漆塗りである。意匠や形態、仕様が図と共通することから、「菊八葉御輿圖」の原物と考えられる。「乗輿一」内題「當時御車轅圖」と同じ様式の網代輿は聖護院と京都御所に1基ずつ現存する。構造部は木製で黒漆塗り、外装は黄色の網代である。聖護院の網代輿には二重菊の文、京都御所の網代輿には唐八葉の文が描かれる。2基の網代輿は上皇の修学院御幸のために造られたと考えられ、関係があることは確かであろう。網代輿の主構造は下部・床下、中央部・屋形、上部・屋根の3つに大別できる。そして社寺建築に倣ったことが見て取れる。緩やかな曲線・曲面の意匠が特徴的で、美しく仕上げられた形態からは木工技術の高さが窺える。

聖護院の網代輿の調査結果を基に、筆者が縮尺5分の1の木部構造模型を制作し、国立歴史民俗博物館の企画展示にて展示した。模型には桜材を使用し、手道具と木工機械を併用して制作した。床下は屋形と屋根の基礎となるため歪みなく作ることが求められる。屋形は曲線故の難しさがあるが、正確な加工と接合によって頑丈な構造になる。屋根の三次曲面は垂木と棧の本数の多くして設計し、精密に加工することで実現可能である。実際に木で木部構造模型を作ることによって、部材の形や接合方法には無駄がなく、理に合っていることがわかった。

【キーワード】 聆涛閣集古帖、輿、聖護院、江戸時代、木部構造模型